

Dance with Heart  
The Kikunokai Troupe  
We are burning with enthusiasm  
in creating national art for the new era.  
Chairperson Michiyo Hata

# 日本のおどり

発行:舞踊集団 菊の会

〒161-0031  
東京都新宿区西落合2-21-23  
03-5983-6001(代表)

菊の会 京都八瀬研修所

〒601-1254  
京都市左京区八瀬野瀬町10  
075-712-8701(代表)

http://www.kikunokai.co.jp

Dancing from the heart

## 菊の会創五三十五年目を迎えて

良いお正月をお迎えの事  
と存じます。

今年、菊の会を結成して早  
いもので三十五年目を迎え  
ました。

皆様から支えて頂き、この  
歳月を一回元気に公演を行  
い、各地にお教室を開き今  
日まで続けて来られました  
事に、心から感謝致してお  
ります。

本当に有難うございました。  
皆様から賜りました御尽力  
に対し、感謝の気持ちを更  
なる努力にかえて、これか  
らも頑張つて参る所存です。  
そして良い舞台づくり、人  
づくりに励んで参ります。  
どうぞ変わらぬ御支援、御  
指導の程を、何卒よろしく  
お願い申し上げます。

尾上菊乃里こと

畑道代



舞踊劇「藍の女」

## 「菊の会」の 益々の飛躍を

新年、明けましておめでと〜うございます。  
毎年、数多くの公演を精力的にこなしておられ  
る畑道代さんと「菊の会」の皆様は、成年の年頭  
にあたりひとこと応援の言葉をのべさせていた  
だきます。

畑道代さんとはじめてお目にかかったのは私が  
NHKの邦楽番組のチーフプロデューサーをし  
ていた昭和四十八年頃で、当時新橋の「東をど  
り」を指導されていた初代尾上菊之丞師の代稽  
古をしておられる新進若手舞踊家ということで、  
NHK放送センターの内玄関でお逢いしたのが  
初めてだと思えます。

その前年の昭和四十七年に畑さんは「日本のお  
どりが身近な舞踊芸術として存在すること」を  
テーマに掲げて舞踊集団菊の会を創立され、日  
本青年館での公演をはじめ数々の公演の度に  
案内を頂きましたが、昨秋「藍の女」を拝見し  
明治維新の逆境の中でたくましく生きるお葉の  
姿に感動致しました。  
そのすぐ後に紀尾井ホールで清元「北州」を踊  
られ、そのあでやかな舞姿にすっかり魅せられ  
ました。

「菊の会」のメンバーの方々は古典にも優れた師  
匠に指導を受けられる事は、舞踊家を志してお  
られる人にとって大変幸せなことだと思います。  
東京新聞社主催の全国舞踊コンクールで「菊の  
会」のメンバーが九年連続で上位入賞を果たさ  
れたことが、それを実証しています。

京都の八瀬のお稽古場にも伺いましたが、素晴  
らしい環境と落ち着いた建物はまさに理想的な  
お稽古場と実感致しました。

「菊の会」にとって今年はまだ一段「飛躍」の年  
でありますようお祈り申し上げます。



松本市音楽文化  
名誉顧問  
塚田 博  
Hiroshi Tsukada





日本のおどり新年号 〈座談会〉

新春特別企画

【座談会出席者】

公演メンバー代表

舞踊劇「藍の女」をはじめ、菊の会の設立当時から、数々の作品を書いて頂いた三隅治雄先生と舞踊集団「菊の会」の畑道代表と、そして公演メンバーを代表して六名の方に参加して頂き、菊の会の草創からのエピソードと苦労話を、そして現在から未来に向かって菊の会への熱い想いを語って頂きました。

司会 新年明けましておめでとございます。

本年、菊の会も創立三十五年目を迎え、年頭に当たり、菊の会設立より数々の作品を創って頂き、大変お世話になっております、三隅治雄先生をお招きし畑代表と「菊の会の過去・現在・そして未来へ」と題しましてお話を進めて参りたいと思います。また、本日は公演メンバーの中から代表して六名の方々に参加して頂きました。

た。みんな心から感謝の思いで一杯です。昨年は折々にふれて、みんな成長してくれたなあ、という場面がありました。しかし本場に忙しくて、じっくりとしゃべってられない年でもありました。「藍の女」の作品で最後を締めくくらせて頂きましたが、各地で好評を頂いて三十四年間頑張ってきたことに、心から感謝申し上げます。本当に有難うございました。

畑代表 昨年一年、大変に有難うございました。本年もどうぞ宜しくお願い致します。

それでは、三隅先生に菊の会の三十四年間を振り返って一番心に残っていることをお聞きかせ願いたいと思います。

三隅先生 こちらこそ、宜しくお願い致します。

畑代表 又、今迄の中で一番充実した二年を過ごさせて頂きまし

三隅先生 もう三十四年経ったのかと言っ思いなんですけど…。何が思い出かと言つと、とにかく三十四年の全てと言つ事になりますが、二つ二つ作品をやらせて頂

いたその初日の感動というものが印象として非常に心に残っております。その中でも菊の会が旗上げするということになって、「ふるさと囃子」という作品を私が組み立てて稽古場に行った時に、忘れも致しません錦糸町のお料理屋さんで三階へ行った時に、小さい子供達がずらーと並んで稽古に励んでいる。えー、この子供達が…。大丈夫かなあと、この時に原さんや竹田さんが居らしたのでしようけれど、その子供達がお面を付けて、そして縄引張つて、と言つような場面があつて、それを生懸命にお稽古してる姿つていつのが今だに強く、印象づけられている…。で、いよいよ文京公会堂で初日を迎え、胸がドキドキしました。しかし子供達が非常に良くやった、そして子供達を指導していく畑先生の姿がとて若くて美しくつて、今もそうですけど、それでいてビビシつまり指導の仕方つてというのが、何ていうのが精神がピシッと入り込んで、それを子供達が受け止める、その姿が大変美しかったのが思い出、これが一点。それから菊の会が早々にインドへ行く事になって…。ところが畑先生が病気になるって入院し

芸能学会会長

三隅治雄

原 聰

鶴岡 泰重

飯田 栄志



# そして未来へ

舞踊集団 萩の会  
代表 畑 道代  
(尾上菊乃里)  
司会 佐竹 永光  
宮沢 りか  
枝木 泰子  
土屋明日香

やったんだなあ。行く前に、それでお稽古が大変だったんで私が立ち会って、そこへ当時、民音の代表理事だった秋谷栄之助さんが激励にこられた。そして、その激励の中で将来どのようになるか解らない人達だったけれど、とにかく周りからもがんばれ！それから当人達も、やるぞーその気迫が、私にはその初演の時からインド公演のまだ形として体を成さない、その時の必死な取り組み



三隅 治雄 先生

の姿が印象的でした。それは同時にまた畑先生の健気とも言うべき捨て身の姿勢ですねえ。それがやっぱり感動的でしたねえ。つまり、菊の会の立ち上げの頃のその取り組み方、子供達がいままで続くかわからない、その子供達の一生懸命の姿が印象的でした。

公演メンバーの皆さんからも過去の思い出や一番心に残っている事をお聞きしたいと思います。

原 私も旗揚げ公演から入ら

せて頂きまして、その時々には印象に残っているのが、全部一番の思い出の様に思うわけです。三隅先生の「おけさ海を行く」の公演の時、東横ホールだったでしょうが、畑先生がまだ何も解らない僕らや、菊の会の固まらない人達とかでやっておられましたから「おけさ海を行く」の第二部で「八島」を踊られて舞台を降りられる時に両肩を抱えられながら楽屋へ戻られる姿を子供の頃に見たり、それから「馬車道の人々」の初日の前日に全く声がお出にならなくなってしまうたり、それから「

指導の精神がピシッと入り込んで、それを子供達が受け止める、その姿が大変美しかった。



畑 道代 代表

畑先生のマンションの一室でみんな部屋に座っていて、なぜか僕だけがイスに座っていて、よけいに居心地が悪くて、これから自分は

どうなっていくんだろうかと言ふふうを考え、何かおぼろげに一月に旗揚げ公演があると言ふ予定を伺っていたので、その時までやって、そして終わるだろうという思いでそこに座っていた事が「



原 聡 さん

という作品が私にとつての初舞台だったので。その時、初めて舞台で、よさこい鳴子踊りを沢山の女の子で踊らせて頂く事になっていたのですが、たしか「ハル」の時の時でしたか、三隅先生が観られて、優しい笑顔で「ちょっと、この鳴子は止めましょうか？」とおっしゃったんです。ショックで、みんなもエーッと云っていた時に畑先生がそんな私たちを心配して「そんなことないわよね」「みんな頑張るわよね」とおっしゃ

番心に残っております。三隅先生 今伺っていると話が全部、畑先生がひっくり返って、倒れて、入院してしまつたと言つ…。(笑) みんなで畑先生をいじめてねえ…。(笑)

宮沢 旗揚げ公演の時、母が「ふるさと囃子」と言う作品に出させて頂きましたので、私は客席で拝見させて頂いて。それから、しばらくして入門し、私は二回目の「黒潮に躍る」(昭和四十九年)



宮沢 りか さん

三隅先生 笑顔で番きつい事を言ってしまったのね。(笑) 畑代表 広いところでしたので円に成らなくて、一列みたいになつてしまつたので、この踊りはやめましようとおっしゃったのですよ。

鶴岡 小学校五年生の時に入られて頂いて、「ふるさと囃子」という作品でしたか、樽神輿ではじめて舞台に出させて頂いた時、たしか二十二名の男の子達の中に

僕一人途中から入ったものですが、人見知りでも誰とも話をする事が出来なかつたんです。唯一、佐竹さんだけが話掛けてくれて、その佐竹さんがみんなからいじめられていた、という感じだったんです。(笑) そんな中、銭太鼓もひと月ぐらい



で覚えなければいけないと毎日毎日、先輩が自宅に二、三人来て下さり、お稽古して下さい、あつと言う間に出来るようにして下



飯田 栄志さん

さった。その後、半年ぐらいで「黒潮に躍る」の作品になった時に一番新しい自分が準、主役に抜擢されて、畑先生の弟役をさせて頂きました事が、とても印象深いですね。

をいきなり、バシーンと投げられたんです。その時、かぶっていたお面の中で汗がスーと流れて「うわー怖い」

僕が入ってきて初めて怒られたのがそれで、帰りの電車の中で、もうやめようかなあと思った最初の思い出でした。

**三隅先生** でも、よくやめなかったねえー。

**土屋** 私、子供の頃からお稽古させて頂いたんですけれど、初めて菊の会の舞台上に立たせて頂いたのは、十三年前の「藍の女」の舞台でした。当時私は高校生でまだ出させて頂く予定ではな

私がお清役に抜擢して頂いたんです。それこそ芝居もやらない頃で、畑先生は二つ三つ細かく教えて下さり、無我夢中で舞台を勤めさせて頂いた事がとても印象に残っております。

**飯田** 私の初舞台は一九八二年の「ふるさと囃子」で小学六年生の時でした。ひよっとこの踊り、傘踊り、そのほか口上をやらせて頂きまして、二人ほど入る会場で緊張しながらやったのが印象にすごく残っております。

そして、口上が終わった時に客席から、白い固まりが沢山舞台上に飛んできて、「何だろうこれは？」

昼の部の一番最初の回が芸術祭参加と決まり、みれば、ここが一番苦しく印象的でした。

**三隅先生** 何で主役になったんですかねー。(笑)  
早くやめる人だという感じだったからねー、やらせたんじゃないですかねえー。(笑)

**鶴岡** あと「ふるさと囃子」の作品の中で「飾山囃子」でひよっとこの踊りがありまして、みんなお面を付けて踊るんですが、畑先生が見て下さる稽古で、僕が足を間違えて、もう一度やり直して又間違えたんですねえ、そしたら畑先生が机に置いてあるお扇子

「藍の女」のお稽古を見せて頂いている時、たまたまお清役の先輩が畑先生から怒られて、「誰かほかに出来ないのー」と言われ

と包んである物をあげると、お金なんです。本当に、もの凄いく数のおひねりが飛んできて……。



ドイツ、エアフルト市のエアフルト劇場於

**三隅先生** どの時でしたか？

**原** 厚生年金会館でした。たしか菊の会創立十周年の時の再演の時ですね。

**飯田** その時、祖父母が見に来てくれました、そのおひねりを広げましたら、その中に「おめでとう」と書いてあったのを見てす



枝木 泰子さん

ごく感動しました。そしてその公演が終わった後に畑先生からお手紙を頂きまして、その当時、小学生だったばかりにまでお手紙を書いて下さる畑先生の細やかなお心にすごく感動しました。

**枝木** 私は先日、ドイツとチェコの公演で特にチェコの国立オペラ座で踊らせて頂いた事がとても感動でした。二百年前モーツァルトの作品が初めて公演されたと言った歴史ある素晴らしい舞台で、自分がそこで踊らせて頂いた事、そしてその本番の前日にその会場でおペラ「椿姫」を見せて頂きました事が言葉では言い表せないくらい、何かわからないんです

が毛穴から何かが浸透してきた様な、そんな不思議な経験をさ

せて頂きました。そして日本文化に携わる人間として、これからしっかりと勉強して行かなくてははいけないと身に浸みて帰って来る事が出来ました。畑代表には三十四年間、数え切れない程の思い出やご苦労もあると思いますが、その中でも一番お心に残った事をお聞きかせ頂きたいと存じます。

**畑代表** 先代の尾上菊之丞先生から、よく「身に浸みない人」って怒られました、自分でも苦しいと言った事とかが、あまり身に浸みない方なのかなあ、と思います。それでも忘れられないのは舞踊劇「カッチャ行かねかこの道」の二部の終わりが思う様にならなかったことです。

全員が衣裳の早変わりの中で、丁度有賀二郎先生の美術で幕が細く切つてあつて、私の主人役の男性が子供を肩車して私と三人で鬼剣舞の仮面をつけて幕の中央から飛び出して来る所で飛び出す前に客席からどうしても見えません。

その細く切つた暖簾の様幕の後ろに黒い幕を降ろしてもらいたかったのが、バトンが無いため結局降ろしてもらえず、体が見えない様にしたと言った私の舞台の美意識の神経にさわってしま、しかもその場面は盛り上がる所で子供がお面を付けると正



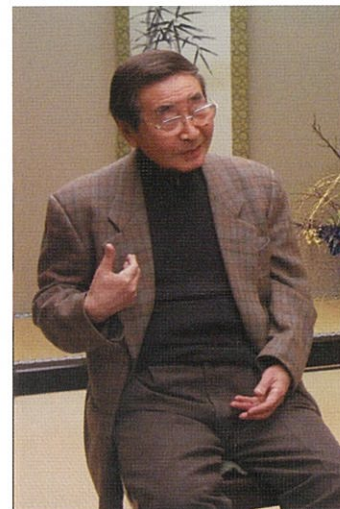
面がわからなくなりました。…そんな事が二気に重なって努力が追いつかなかった。

あとは長いセリフを覚える事に苦勞しまして、そのプレッシャーで前髪の所がみるみる円形に白髪になって、最初の「カッチャ行かねかこの道を」はとても苦しかったですね。

砂防会館で二日間、昼夜四回公演をしたのですが、その風の部の一番最初の回が芸術祭参加と決まり、審査の先生達が観に来て下さる、まだみんな第二回目の風の公演に体が全開出来ない。もの凄いプレッシャーで、「ここは絶対負けられない」という今にしてみれば、ここが一番苦しく印象的でした。しかし文化庁の芸術祭で、当時の大衆芸能部門の第一席で優秀賞に入り、苦しさは喜びに変わりました。

それでは菊の会にとりまして、今一番必要な事を三隅先生にお聞かせ頂きたいと存じます。

**三隅先生** 私が菊の会にかけた夢の一番大きなものは、踊りというものでお客様を呼べる、つまり一般の人々が踊りを求め、お金を払ってでも見たいという気持ちになる、そういうおどり。歌舞伎とは全く別個な踊りというものでお客様を呼べる。そういう踊りを創らなければ日本舞踊の将来はない。したがってそういう舞踊の集



京都八瀬研修所公演を終えて

## 舞台上立つことの有難さを日々感じて、その日の舞台に命をかけて立つべきだと思います。

合体になってほしいというのが、大きな願いでした。そのためには、身体の表現の中にドラマ性が無いといけない、つまり人々の中に訴える力、それが身体で表現できると踊りお客様を呼べるようになる。

なければ、どうしようもない。歌舞伎役者が舞踊の人よりも、訴える力を持っているというのはそういう身体表現という訓練が



鶴岡 泰重さん

根本的に今まで積んできている。同時に三味線、鼓等の楽器。そういったものの演奏を身に付けるのも歌舞伎俳優の訓練の一つ。それを舞踊をやる人がなぜやっていないのか、ただ単に踊りをチャンネルチャンネルの音のつて振りを生から学ぶだけ、それでは到底だ

とは何かと言うと、先程、泰重さんが舞台に立つことの有難さを海外公演で実感したと言いましたが、二日舞台に立てることは、これは大変な事なんです。一般の踊りの人たちは、何年かに一度とか、一年に一回のおさらい会の舞台に立つ程度です。何百万円も出して踊っている、そうして踊っても二十分間であつという間に終わってしまふ。舞踊家は今まで皆そう、もう大変なお金出してでも舞台に立つ、立つたこと自体が、その人にとって生涯の喜びだ！

ぐらいに、役者さんでない限り大変な事なんです。

その大変な事を、皆さんが現実毎日のように経験している、それならばその舞台に立つことの有難さというのを日々感じ取って欲しいなと思う。みだりにおろそかにならないで舞台に立つ事自体の重さ、喜びを痛感すべきだと思う。少なくとも尾上菊乃里という人が舞台に立つてきたときには、そういう舞台に二日立てる事のすごさ、ありがたさを感じ取ってきた。

日その日の舞台に命をかけて…。お客様が見に来てくださって、お客様のお陰で私はここに立っている、そういう思いをもって舞台に立つべきだと思います。

その思いが、欠けたときに舞台が荒くなると思う、菊の会のこれからの大事な点は、何回やった公演であろうと、その日その日に命を削る思いで、生命を張って…。舞台公演の前になると、病になる人はけっこう多いですね…。と言つことは生命を張る緊張感ですよ。そういう緊張感が常時もてるように励む事が、菊の会のメンバーの大事な点じゃないかと思ひます。



土屋明日香さん

ドラマが演じられるように成つた事。だからセリフが無くて、もうセリフが体の中で唸って、たまって吐き出せるようになってくる。自分で楽器を弾かなくて、リズムが体で全部楽器みたいになって、動けるようになってきている。それはもう身に付いていると思う。

全部セリフを言わなくても体で







# 創立35年目を 感謝の思い

## Heading toward th



結成当時の「ひまわりグループ」中央が畑代表、左から3人目が宮沢りかさん

これに築いていかなくてはいけないと思つています。特に日本の三味線や唄、たとえば長唄から義太夫に至る古曲を含めて、その語り口とか、三味線を弾くその瞬間の楽しさを少しでも味わつて下さつて、それを自分のものとしていく環境をつくらなきゃいけないんじゃないか、そしてまた、次に皆さんがその味わつた物を次の人に自然に教えるのではなくて、共に感じて行く中に伝統がある

それなりに楽しかったのですが、これからその問題をどのように解決していくかにかかっていると思ふます。で、皆さんも、もつともつと曲目を覚えて自分で自然に稽古していく習慣と菊の会の歴史をどうつづけていくか、これはみなさんと共に築いていかなくては

に惚れ抜いていた、その人たちの中で、一緒にいられた事がどんなに財産になつてゐるか、と思つてです。又、先代の尾上菊之丞先生も芸に対しては、何て言つたら良いのか、特別の方でしたし、あの六代目もまた、かつてない芸の神様であつた訳ですから、そういう所に繋がつてゐる事の幸せを、どう皆さんに伝えて、又ここにゐる人たち、次の人にどう伝えていけるか、と言つそれが私達の使命であると思つて今年はその第一歩を踏

み出したいと思つております。特に自分が育つた家というのが、本当に芸に対して真摯といひますか、「いいのよ」それくらいでいいわよ」ということは絶対に無かつた家庭で育ち、その家庭と厳しい師匠の元にいられたと言ふことが最高の幸だつたと言ふそれにしても、よく私の側の環境はあんなに一流の人の弾く音、唄、踊り、全ての芸が好きで好きで芸

**日本のおどりの美しさ、日本のおどりの底力の強さ、日本のおどりの生命力、こうしたものを胸を張つて世界に示す、これから時代が展開して行くだろうと思ふ。**

三隅先生 やはり、菊の会の一つの大きな特色は、一人一人がソリストとして立派な舞踊家に成つていく、この路線と、それから集団のみんなの力で二つの作品を創り上げる、この両方の路線を見事に成していく所に菊の会の特色があるかと思ふ、ふつと舞踊集団というと集団の中に全てを入れてしまつて、統括してしまつて、そして集団で表現する以外に個人は埋没する、これは多くなりやすいんです。だけど、とにかく尾上菊乃里と言つ一人の舞踊家がい

達に対しても畑先生はみんな舞踊家として絶対に他の舞踊家の人に負けないだけの、それだけの古典をきちつと教え込んで行く事に勤めてゐる。と同時にみんな作品を創つてゐる……。私はこれは大事な事だと思ひます。だから特に大事な事は日本のおどりの美しさ、日本のおどりの底力の強さ、日本のおどりの生命力、こうしたものを、胸を張つて世界に示す、これから時代が展開して行くだろうと思ふ、その事のために一人一人が優れたアーティストであると言ふ事が大事だと思ひます。また同時に、集団として作品を創り上げていく事、そして、どちらも重ね合わせた時にその集団の中にある一人一人が綺麗

麗な人間に、つまり素晴らしい日本人として示す事が出来る、その人間の輝きが踊りを輝かせるし又、踊りの輝きがその人を成長させる事に成るでしょう。現実に今、菊の会の毎日の行動の中にそれは現れてきてゐると思ふ。この中に入つて汚く成つた人はいません。みんなやっぱり美しい男性になり、美しい女性になつてきたと、私は外から観て思ふのです。だからこれは、同時に「これが日本人だ！」そして日本人であると同時に「人間なんだ！」という



事、この人間のもつてゐる生命力の輝きをこれから、より集団として個人として顕現してもらいたい、そうすると私はこの菊の会のおどりと言ふものは、おそらく多くの世界の人々を感動させられるだけの物に成るだろうと、そのように思ひます。それが私の菊の会に対する期待であり、又菊の会のこれからを生まみ出して行く可能性であると信ずる由縁であります。どうか頑張つて下さい、期待しております。三隅先生、畑代表、本当に有難うございました。ご期待に添えます様、今年も頑張つて参ります。本日は誠に有難うございました。

り上げる、この両方の路線を見事に成していく所に菊の会の特色があるかと思ふ、ふつと舞踊集団というと集団の中に全てを入れてしまつて、統括してしまつて、そして集団で表現する以外に個人は埋没する、これは多くなりやすいんです。だけど、とにかく尾上菊乃里と言つ一人の舞踊家がい

達に対しても畑先生はみんな舞踊家として絶対に他の舞踊家の人に負けないだけの、それだけの古典をきちつと教え込んで行く事に勤めてゐる。同時にみんな作品を創つてゐる……。私はこれは大事な事だと思ひます。だから特に大事な事は日本のおどりの美しさ、日本のおどりの底力の強さ、日本のおどりの生命力、こうしたものを、胸を張つて世界に示す、これから時代が展開して行くだろうと思ふ、その事のために一人一人が優れたアーティストであると言ふ事が大事だと思ひます。また同時に、集団として作品を創り上げていく事、そして、どちらも重ね合わせた時にその集団の中にある一人一人が綺麗

麗な人間に、つまり素晴らしい日本人として示す事が出来る、その人間の輝きが踊りを輝かせるし又、踊りの輝きがその人を成長させる事に成るでしょう。現実に今、菊の会の毎日の行動の中にそれは現れてきてゐると思ふ。この中に入つて汚く成つた人はいません。みんなやっぱり美しい男性になり、美しい女性になつてきたと、私は外から観て思ふのです。だからこれは、同時に「これが日本人だ！」そして日本人であると同時に「人間なんだ！」という

事、この人間のもつてゐる生命力の輝きをこれから、より集団として個人として顕現してもらいたい、そうすると私はこの菊の会のおどりと言ふものは、おそらく多くの世界の人々を感動させられるだけの物に成るだろうと、そのように思ひます。それが私の菊の会に対する期待であり、又菊の会のこれからを生まみ出して行く可能性であると信ずる由縁であります。どうか頑張つて下さい、期待しております。三隅先生、畑代表、本当に有難うございました。ご期待に添えます様、今年も頑張つて参ります。本日は誠に有難うございました。

事、この人間のもつてゐる生命力の輝きをこれから、より集団として個人として顕現してもらいたい、そうすると私はこの菊の会のおどりと言ふものは、おそらく多くの世界の人々を感動させられるだけの物に成るだろうと、そのように思ひます。それが私の菊の会に対する期待であり、又菊の会のこれからを生まみ出して行く可能性であると信ずる由縁であります。どうか頑張つて下さい、期待しております。三隅先生、畑代表、本当に有難うございました。ご期待に添えます様、今年も頑張つて参ります。本日は誠に有難うございました。

麗な人間に、つまり素晴らしい日本人として示す事が出来る、その人間の輝きが踊りを輝かせるし又、踊りの輝きがその人を成長させる事に成るでしょう。現実に今、菊の会の毎日の行動の中にそれは現れてきてゐると思ふ。この中に入つて汚く成つた人はいません。みんなやっぱり美しい男性になり、美しい女性になつてきたと、私は外から観て思ふのです。だからこれは、同時に「これが日本人だ！」そして日本人であると同時に「人間なんだ！」という



舞踊劇「日本大通り」のラストシーン群舞「流れ」



# 菊の会のあゆみ

～昨年1年の主な菊の会の行事～



**1月** 町田市、柏市、栗橋町、そして金沢市で初の自主公演を開催。  
月末には菊の会スタジオでアトリエ公演を開催。



**2月** 畑代表とスタッフがドイツ・チェコの劇場を視察。  
左より、谷元久美子さん(菊の会事務局)畑道代代表、舞台監督・梅澤秀次氏、照明・照井芳男氏。



**3月** 1月に引き続き、東京菊の会スタジオでアトリエ公演を開催。



**4月** 恒例の友の会総会及び懇親会を東京會館で開催。  
又、桜満開の京都八瀬でアトリエ公演を開催、好評を博した。



**5月** 若者達の舞踊会第7回「さつき会」を開催。  
若者達の熱気溢れる舞台に観客が感動の拍手を送って下さった。



**6月** 「初夏に舞う」と題して、東京アトリエ公演を開催、地域の皆様が多数お越し下さり、大変に喜ばれた。



**7月** 6月に引き続き「涼風に舞う」と銘打って菊の会スタジオでのアトリエ公演を開催。



**8月** 第31回教室発表会は、前夜祭を含め2日間にわたり盛大に開催。昭和51年から続けている本会は、本年出演者総合計249名となった。



**9月** 文化庁国際芸術交流支援事業の記念公演を中央区、千葉市、富士見市、江戸川区で開催。ドイツのエアフルト・ドレスデンとチェコのプラハへ出発。



**10月** 帰国後、京都八瀬研修所が、秋の京都の風情を詠った作品「錦秋に舞う」を開催。



**11月** 秋の自主公演、舞踊劇「藍の女」が日野市、荒川区、町田市で、12月所沢市、甲府市、館林市で再演された。



**12月** 掉尾を飾るアトリエ公演を東京菊の会スタジオに於いて開催。

## 寿の舞 —— 2006年行事予定

### 【菊の会新春公演 ～日本のおどり～

1月20日(金) サンシティ越谷(小ホール) 14時半・18時半  
1月22日(日) 鹿嶋勤労文化会館 14時半  
1月26日(木) アミュゼ柏 14時半・18時半

〈入場料〉¥5,000 全席自由(当日5,500円)

〈演 目〉義太夫「延年三番叟」清元「扇」狂言舞踊「棒しばり」  
舞踊選集「新しい時を刻んで」Part2

### 【菊の会アトリエ公演 東京スタジオ・京都八瀬研修所公演】

2月17日(金)～19日(日) 菊の会スタジオ ～立春に舞う～

3月19日(日)～21日(火) 菊の会スタジオ ～早春に舞う～

〈入場料〉¥4,200 全席自由(当日4,500円)

4月 7日(金)～9日(日) 京都八瀬研修所 ～春宴に舞う～

〈入場料〉¥4,500 全席自由(当日5,000円)

### 【第24回友の会総会と懇親パーティー】

〈日 時〉4月23日(日)

〈会 場〉東京會館 総会11時シルバールーム・懇親会12時ローズルーム

〈会 費〉2万円

### 【さつき会】～若者たちの舞踊会～

〈日 時〉5月5日(金・祝) 3時開演

〈会 場〉中央會館

〈入場料〉全席自由¥3,800

## 「今、思うこと」

菊の会天舞グループ3期生 土屋明日香



昨年の暮れのアトリエ公演で思いがけなく、大和楽「樋口一葉」を踊らせて頂く機会を頂きました。二十五歳という若さで他界した樋口一葉の生涯、そのはかなさと残された珠玉の作品を思うにつけ、あの肖像からは測り知れない、どれ程の無念の思いだったかに思いを馳せました。短命であっても逆境の中で秘めた情熱をかき立てて、懸命に生き抜いた密度の濃い人生だったのだと強く感じました。

現実の貧困の中で自分の願いを実現しようとした苦労は彼女の人間味を深め、だから人の心をうつ輝きとなって優れた多くの名作を残したのだと思いました。  
舞踊もまた同じで、畑代表が常日頃、どんな時でも命懸けて妥協を許さず取り組む姿を身を以て教えて下さっていると痛感しています。

舞踊が刻々とうつり行く肉体をもって表現する瞬間芸術である事から言えば、違った視点で文学より難しいものが要求されていると言えるでしょう。

舞踊が人間の喜怒哀楽を表現し、人の心に訴え、人の心を癒し、人の心を開かせる程の心と技を身に付ける

ならば、それは精神的に人間性回復の特効薬ともなりうるわけで、今、混沌とした時代にあって、私達の心が一つでそれが妙薬ともなるとの自覚をもって心豊かだった時代の人々が残して下さった、大切な文化をより発展させる為に、自身の血肉として行く事に真剣に取り組んで行かなくては行けないと思っています。



プロフィール  
土屋明日香 Asuka Tsuchiya

7歳より畑道代に師事、19歳から畑代表の内弟子となり6年半務める「藍の女」のお清役に抜擢される。その他、菊の会の多くの作品に出演。2002年全国舞踊コンクール(東京新聞社主催)邦舞第1部において大和楽「蝶」で2位に入賞。現在、若手の中核として活躍。